



Title	Coming Out Experiences of Non-heterosexuals and their Families in Japan
Author(s)	元山, 琴菜
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (元 山 琴 菜)	
論文題名	Coming Out Experiences of Non-heterosexuals and Their Families in Japan: Asserting Normality and Preserving Harmony (日本における非異性愛者とその家族のカミングアウトの経験——「ふつう」へのこだわりと和)
論文内容の要旨	
In a heteronormative and homophobic environment, coming out to one's self and others is a challenging experience for non-heterosexuals. Specifically, coming out to their own families is considerably more difficult because family is seen as a vital part of life. Family members also face difficulties “understanding” and “accepting” the fact that one of their members is a non-heterosexual. The studies of non-heterosexual coming out and the experiences of family members have developed mainly in the field of Western psychoanalysis. Only a few examples exist in Japan. Previous research neglected cultural specificities, but nevertheless predicted that the experiences of non-heterosexuals and their families would differ in different societies with different norms and cultural values. This paper explores how the experiences of non-heterosexuals and their families were affected by Japanese cultural norms of interaction, family and gender. Interviews with 24 non-heterosexuals revealed that they had to deal with “perceived homophobia,” which was created by the expectation of “respectable Japanese selves,” in addition to heteronormativity and homophobia. Interviewing family members in 12 families with non-heterosexual members clarified the character of the struggle over “accepting” and disclosing a non-heterosexual member to others as due to the fear of courtesy stigma. This stigma existed in society generally but was even stronger in the more intimate sphere called <i>seken</i>. Thus, family members emphasized non-heterosexual members being “normal or ordinary (<i>futsuu</i>).” In proclaiming the normality of non-heterosexual members, they recalibrated heteronormativity inside and outside the family. Insisting that having a non-heterosexual member was <i>futsuu</i> was used as a strategy (“<i>futsuu</i> strategy”) of family preservation. However, it also perpetuated the force of <i>seken</i> and reproduced heteronormativity.	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (元山琴菜)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教授	牟田和恵
	副 査	教授	スコット・ノース
	副 査	准教授	辻 大介

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本における文化規範・ジェンダー規範が非異性愛者とその家族の経験にいかなる影響を与えているかを考察したものである。

異性愛規範とホモフォビア（同性愛嫌悪）が根を張る社会において、自身の性的オリエンテーションを受け入れ、他者にそれをカミングアウトすることは非異性愛者にとって大きなチャレンジとなる。その中でも、家族へのカミングアウトは特に難しいと考えられているが、他方、カミングアウトされた家族成員もまた、その家族メンバーを理解し「受け入れ」るうえで困難を抱えることが指摘されている。この点に関して西洋をフィールドとして研究がある程度蓄積されているものの、文化的差異にじゅうぶんに目が向けられておらず、本研究が着目するように異なる規範や価値観もつ社会では、かれらの経験にも違いが生じることが予測される。

本研究では、24人の非異性愛者とカミングアウトされた家族成員24人（12家族）へのインタビュー調査を行い、西洋での事例同様、かれらは異性愛規範とホモフォビアによる葛藤を抱えることが分かった。しかし、それに加え日本では、他者を思いやり協調性を重要視する規範が強いために、「予想・認識されたホモフォビア（perceived homophobia）」への恐怖心を抱くことが明らかになった。

さらに、12家族へのインタビュー調査からは、非異性愛メンバーを「受け入れ」る際、そしてそのことを他者に話す際、「縁者のスティグマ」への恐怖心から葛藤を抱えること、この縁者のスティグマは社会に一般的に存在すると考えられるが、日本では「世間」との関連によってそのスティグマの影響力が増すことを明らかにしている。世間とは、人間関係、そのあり方、そしてその関係性の中で共有されている協調性や共感性を大切にする規範のことを指す。そのため、家族成員は非異性愛メンバーを「受け入れ」、縁者のスティグマへ対処として、非異性愛メンバーの「ふつう」さを強調する。こうした「ふつう」を強調した「受け入れ」方や、他者に話す際に使われた「ふつう戦略」は、家族の中と外における異性愛規範を組み替える上で有効であり、さらに、家族成員は非異性愛メンバーを含む家族を「ふつう」と再定義することで、家族を再構築していく。しかし、他方で「ふつう戦略」は、世間における規範や異性愛規範を再生産する機能も持っていることを指摘した。

以上のことから、日本における非異性愛者とその家族の経験は社会規範や価値観に大きな影響を受けていることが確認され、そこから西洋の研究だけでは、かれらの経験を説明しきれないことが明らかにされており、本研究は、比較社会学的手法を通じて非異性愛者とその家族へのより普遍的な理解に貢献したといえる。また、本博士論文は英語で執筆されており、アジア研究・クイア研究等に国際的に学術的貢献をする可能性をより広く開いているといえる。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。